

〈研究会報告〉

立正大学社会福祉学部子ども教育福祉学科 板野 晴子

【研究会報告】

筆者は2017年度から社会福祉研究所共同研究のプロジェクト企画運営メンバーとして、「研究対象としての人間のとらえ方をめぐって——本学部の研究・教育のアイデンティティと独自性の確立と特色づくりに向けて——」のテーマの下、「幼児教育・学校教育へのリトミック受容の一端」としての発表を行った。この度、2018年度まで引き続いた本プロジェクトの纏めの時期となった。ここでは筆者が行った発表の報告を記す。発表日は2017年12月6日であった。以下、要旨に続き発表内容を示す。

[要 旨]

幼児教育・学校教育へのリトミックの受容の一端
——明治、大正、昭和初期の教育学者らに着目して——

How Eurythmics was Adopted in Preschool and School Education
——Education Scholars of Meiji, Taisho and Early Showa Era——

はじめに

J = ダルクローズによって創案されたリトミックは、特色のある音楽教育法として着目され、我が国においては主に幼児教育において活用されてきた。現在は学校教育の音楽科の授業においても、主体的・能動的な学びを構築する手立てとなりうるとして注目されている。リトミックの実践法についてはこれまでも多くの検討がなされてきた。しかし、リトミックの教育理念や導入史についての研究は充分になされてきたとは言い難い。我が国におけるリトミックの導入史研究では、小林宗作（1893-1933）、天野蝶（1891-1979）、板野平（1928-2009）の3者を中心に、各人によるリトミック導入の経緯と評価が明らかになっている。この3者の取り組みは、戦後から現代に続いている日本の音楽教育のありようと繋がっているものであるが、それ以前の日本の教育とリトミックとの関連性や詳細は未だ詳らかにされていない。

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、音楽教育法であるリトミックが日本に導入された経緯を明らかにすることにある。文献や史料を基に、先述の3者以前にリトミックに関心を寄せた教育者らに着目

し、彼らの教育観を明らかにしてゆく。

2. 日本へのリトミック導入史の概要

リトミックは歌舞伎役者、舞踊者、演劇人ら表現者、音楽教育家らによって着目されていたが、幼児教育、学校教育の第一人者らの名も挙げられている。

3. 各分野における発展

3-1 幼児教育界におけるリトミックの検討

3-2 欧米視察にみるリトミックの報告

3-3 女子教育へのリトミックの意義と実践

3-4 教育の方便としてのリズム教育研究

日本が欧米文化の影響を強く受けた19世紀後半～20世紀前半の教育界において、我が国を代表する幼児教育者である倉橋惣三、幼児教育の様相を視察しに渡欧した学習院女子大学教授の宇佐美ケイ、『女子教育』の理念のもと開学した日本女子大学の初代体育教師白井規矩郎、海外教育思潮の研究や教育制度を専門とする日本の代表的教育学者である阿部重孝ら、それぞれの専門的見地からのリトミックの検討、報告、実践、研究の一端が明らかになった。明治、大正、昭和の初期にかけての日本の教育界の担い手であった彼らが、リトミックに教育的価値を見出していたことは、歴史的研究の成果の一つとなりえよう。

本プロジェクト研究テーマ「研究対象としての人間のとらえ方をめぐって—本学部の研究・教育のアイデンティティと独自性の確立と特色づくりにむけて—」の実現をめざし、この学問的成果とそれに基づく教育の在り方との密着性を探りつつ、学生への教育に反映させていきたいと考えている。

[発表内容]

はじめに

スイスの音楽教育家であるJ＝ダルクローズによって創案されたリトミックは、特色のある音楽教育法として着目されている。リトミックは、リズムや音に対する身体的な反応・行動に着目したもので、創造的な人間教育の手段として広く活用されている。20年ほど前にドイツで発刊されたリトミック専門の辞典(1996)には、「過去十数年間、芸術、教育、あるいはセラピーなどの多くの分野においてリトミックの理念と方法が取り入れられてきた。それどころか、例えば心理運動家や音楽早期教育の教師といったような、リトミックを部分的に取り入れているような新しい職業さえ生まれている。今日、他の専門的メソッド(学校音楽、音楽セラピー)への統合に、リトミックという専門の独自性への問いかけが新たに提起されている」と記されている。本辞典の訳者：河口道朗は「いろいろな分野に広がるリトミック

に関して、その理論と実践から応用まで」見る必要があることを述べている。リトミックは音楽の技術教育の枠を超えた受け止め方がなされているメソッドである。

現代の日本では、リトミックは主に学校教育と幼児教育において活用されており、昨今、アクティブ・ラーニングが注目されるに至り、学校教育の音楽科の授業においても、主体的・能動的な学びを構築する手立てとなりうるとして、多くの実践方法が報告されている。多くのリトミックの実践法については世にあふれている一方で、リトミックの教育理念や導入史についての研究は、充分になされてきたとは言い難い現状である。特に、リトミックの導入史研究は、未完の状態であると断言できる。近年ようやく小林宗作、天野蝶、板野平の3者を中心に、各人によるリトミック導入の経緯と評価が明らかになりつつある。この3者の取り組みは、戦後から現代に続いている日本の音楽教育のありようと大きく関係するものである。しかしながら、それ以前の日本の教育とリトミックとの関連性や詳細は未だ明らかにはなっていない。

1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、音楽教育法であるリトミックが日本に導入された経緯を明らかにすることである。経緯や歴史を踏まえることは、将来の日本の幼児教育、学校教育、そして教科「音楽」の方法のあるべき姿を見据えることとして重要である。文献や史料を基に、先述の小林宗作、天野蝶、板野平の3者以前のリトミックに関心を寄せた教育者らに着目し、彼らの教育観、リトミック観を明らかにする。

2. 日本へのリトミック導入史の概要

J＝ダルクローズによって創案されたリトミックは、西洋においても多くの音楽教育家の注目するところとなった。J＝ダルクローズは、リトミックの創案当初はこの音楽教育法の対象者を音楽大学の学生と考えていた。ハンガリーの音楽教師コダーイ・ゾルターンは、ダルクローズ・スケールを自身のシステムの中で紹介し、ドイツの作曲家カール・オルフはJ＝ダルクローズのリトミックを直接見学している。特色のある音楽教育として注目されたリトミックは、舞台芸術家のアドルフ・アッピア、ドイツの体操研究家のルドルフ・ボーデ、ドイツのダンサー、マリー・ヴィグマンら、舞踊家へも強い示唆を与えている。一方、日本で最初にリトミックに着目したのは歌舞伎役者、舞踊者、演劇人ら表現者であり、現在のリトミック教育に繋がる導入をしたのは先ほど述べた小林・天野・板野ら音楽教育家であった。日本では舞台を中心とする表現者から音楽教育者へ、という海外とは異なる普及をしていることが指摘できる。

3. 結 果

3-1 幼児教育界におけるリトミックの検討

ここでは倉橋惣三のリズム教育の理念に関して述べる。倉橋は我が国の「幼児教育の父」とも呼ばれた幼児教育の研究者、実践者である。倉橋の教育論については文献研究、人物研究、教育観等の様々な視点から研究がなされている。しかし、倉橋の述べるリズムや身体の動き、さらに音楽教育法のリトミックに関して言及する部分を抽出し、その理念を微細に検討しているものは見当たらない。倉橋は「音楽の中に現はれる音の種類を大きく分けると、律音と調音の二つになるが、其中で子供に早く感ぜられるのは律音の方が先きである。其他色々な音楽にならないけれどもリズムだけ具備して居るものに、子供は非常に愉快感⁽¹⁾を感じる」として、子どもの聴覚が身体のリズミ的な動きに関連することを述べている。今回は、倉橋が雑誌『幼児の教育』へ寄せた原稿や座談会の記録から倉橋惣三がリズム教育についてどのような考えを持っていたのかを浮き彫りにしてゆく。

3-1-1 資料『幼児の教育』について

資料とする『幼児の教育』は、当初『婦人と子供』として1901（明治34）年1月に初刊が発行された月刊保育雑誌である。倉橋はこの雑誌編集の中心人物であり、彼の教育観は『幼児の教育』の中に色濃く反映されていると思われる。

3-1-2 倉橋惣三のリズム教育観の変遷

『幼児の教育』には、倉橋のリズム教育観をみることができる。

1) 幼児教育における動きの重要性

倉橋は子どもにとってのリズムと動きについてどの様に捉えていたのか、その考えを次の文章から見出すことができる。

身體の運動に伴ふ感覺は、此の時期の幼児の生活に於て、絶えず十分の満足を要求して居るのである。此の感覺は委しく言へば、關節や腱や、いろ／＼の部分によつて感ぜらるゝが、其の最も主なるものは筋肉である。即ち筋肉に何かの活動が與へらるる時に起るもので、幼児はたゞ受動的に此の感覺を活かそうとする盛なる要求を有して居るのである⁽²⁾／音楽によりて促し立てられた心の自發は、到底靜の状態に止まり得べきものではない。其の音波の一高一低につれて、手は手拍子し、足は足どりし、遂には浮きたてられて舞踊する⁽³⁾のが自然である

このように、倉橋は幼児期の生活において、身体が要求しているのは筋肉感覚であるとし、それが音楽によって促されることは幼児教育にとって重要であるという考えを持っている。次に、倉橋がリトミックについて述べている部分を見ると、倉橋のリトミックについての見解が2面あることが浮き彫りになってくる。

2) 幼児教育とリトミックの関係についての否定的見解

倉橋の座談会の記述には、幼児教育界へのリトミック普及の一端が垣間見える。この座談会が行われた昭和5年当時は、小林宗作が2度目の訪欧から帰国し、リトミックについて積極的に紹介し始めた時期である。座談会のテーマは「遊戯と唱歌」であり、同時にリトミックについても取り扱う設定となっている。日本の幼児教育にフレーベルの理念を紹介し、実践を試みようとしている倉橋らの関心が、幼児教育研究の対象としてリトミックに向けられていることが判る。

（昭和5年）（1930.5）「保育座談會—遊戯，唱歌について—」

神原 今日「遊戯」「唱歌」の本質からお伺ひしたいし、リトミックも話題にとつていたゞき度うございます。

宇佐美先生のお話では外國では最近かなり、幼稚園で一般的に扱はれてゐるようですし、先日小林宗作氏のリトミックの研究発表會を拝見しましても、これは私共として研究しなくつちやと思はれました⁽⁴⁾

座談会の席で名が挙げられた宇佐美とは、次の項で触れる宇佐美ケイである。宇佐美は当時、御茶ノ水女子大の付属幼稚園の教諭であった。後にお茶の水女子大の教授になった宇佐美は数ヶ国をまわり、各国のナーセリースクールを見学し、その場において実践されていたリトミックも見聞して帰国している。この座談会の記録からは、倉橋自身がリトミックをどのように捉えていたのか、彼の考えの変遷を見ることができる。検討する都合上、抜粋した文章には付番をした。

- ①従来の子供の音楽は歌詞が主だ。歌に譜がついているやうなものだ。リトミックでは、リズムを主體として、しかも、それが漸進的に經驗せられて來るところを主旨としてゐる。従つて、時には音楽教育以上人間教育上の効果を説いたりする人さへある。
- ②我々のはリズムよりも歌詞を主にしてゐる。體へ感じるものでしょう。（中略）しかし、音が耳だけでなく、體全體、細胞から動いて來るといふことは凡人にもある筈だ。幼児期は尚更そうだらう。大人は觀念化されて駄目（(マ)なる(マ)）が、小さい時から修練を與へればそれが發達するに相違ない。だから、リトミックは音楽教育のためには有力なものです。但し、幼稚園ではどれ丈の地位を占めるかは問題になる。リトミックの價值とリトミックの幼児教育上の價值とは別の問題ですね。それを人間教育の根本とする論は、内容としてよりも、論の立て方として、どうかね。
- ③リトミック専門家の方では、その根本理論は良く研究されて居よう。吾々はその方の素人だから。その根本を論ずるよりは、これを幼稚園教育に對しての問題として、考えるがよい。ところで、一體感受性の餘んまりセンシブルな教育をすることが、幼児教育として

いゝかどうか。これは問題になりますね。幼児教育はセンシブルの反対、蠻的といつては荒っぽ過ぎるようだが、そんな處のあるべきものではないかしら。感覺といふことさへ吾々は細かいと思ふ。知覺で止めておきたい位だ。そこへゆくとリトミックの方は大分細かい音楽性の訓練として有力なだけ、その點はどうか知ら (ママ)。

- ④だが何しろ見渡した處、リトミックを知らない、論ずる資格のない者ばかりが話してゐるのだから、之 (コ) れは一つ誰か十分やってみたらいいでしょう。(……今、この問題を出すのは早すぎますね、これで切り上げてください。)
- ⑤きりあげないでやつ ((ママ)) 見るんだ。(私、やつて見ますわ)
- ⑥それは大いにいい。(中略) リトミックをやつたにしても幼児教育を損ふ迄の程度なんかにゆきつこないから大丈夫でしょう。(僕は音に対してセンシブルになることは必要だと思ふ)
- ⑦それはそうだが、程度の問題でね、餘り繊細すぎる感受性の教育は幼児期にはいらぬと思ふ
- ⑧男の子にだつて、優美感情も養ふことをわすれてはならぬのですよ。同様に、女の子だつて
- ⑨健康は即ち情操の正しい基であることを、いつしよに考えて下さいよ
- ⑩情操ぬきの健康第一が體操であつたり、健康ぬきの情操第一が遊戯であつたり、そんな考へ方が、最も間違ひなんです
- (幼児の教育復刻刊行会『幼児の教育』1巻-52巻(1979-1981)フレーベル館 より抜粋)

これらの部分には1930(昭和5)年の座談会での様子が記されている。先ず、①の部分からは、倉橋はこれまでの音楽教育では主に歌唱教育が行われてきたことに対し、リトミックはリズムを中心とした教育であると理解していることが判る。リトミックが演奏技術の向上や音楽の基礎的知識の学習のみならず、人間教育の効果までを望めるかどうかに関しては、①の「効果を説いたりする人さへある」という倉橋の言葉の表現や、②にあるようにリトミックが人間教育の根本であるという論旨に疑問を投げかけていることから、多少懷疑的な受け止め方をして見られる。さらに③の倉橋の応答では、リトミックは音楽教育としては有効だ、とその価値を認めながらも、センシブルすぎるものであれば、幼児教育には適さないと述べている。対して、座談会の他のメンバーからは「センシブルになることは必要だ」との意見も出されている。④以降では、当時の幼児教育に於いてリトミックへの関心の高まりを受けて話題にしたものの、時期尚早であったか、と切り上げようとするメンバーや、ぜひ実際にリトミック教育の実践を手掛けようとするメンバーらの会話が記されている。ここには倉橋をはじめとする座談会のメンバーらに「専門家としての知識や経験が無ければ、この新しい教育法に関する討議が深まらない」という意見が出たことに対して、「自分たちの中からリトミックの研究を手掛けるという挑戦的姿勢も必要だ」という、幼児教育に対する彼

らの熱心な姿が表れているように見受けられる。彼らは、リトミックは幼児教育にとって、何らかの良い作用を及ぼすということを感じ取っていたと思われる。

3) 幼児教育へのリトミックについての肯定的見解

倉橋の座談会のやり取りから、彼がリトミックを音楽教育法として認識し、その有効性を認めつつあったことが明らかになったが、倉橋の周囲の幼児教育者らもリトミックを追及する必要性を感じていたと思われる。先の対談の10年後の1940（昭和15）年には「幼稚園でしてゐること―遊戯―」と題して、問答形式で倉橋の考えが綴られている（配布資料内⑧～⑩参照）。倉橋は、この10年前には子どものセンシブルな情操や感情的な部分へ訴える教育に対しての懐疑的発言をしていたが、時を経た後に、幼児教育を情操抜きで考えることは間違いである、との考えを示すようにもなった。さらに問答は続き、倉橋は以下のように回答している。

⑪音楽の第一は耳ですからね。聴音が正しく出来てそれで正しく歌えるのですからね

⑫音楽などいふことになると（中略）天才的な子がゐたら、それを正しく発見して、又特別な指導を考へなければなりません。併し、それは一般の保母さんではむづかしいことです。殊に発見がね

⑬リズムの教育は是非したいし、出来るものです

⑭リズムだけは一通りのところまで教育したいですね。それは、ただ音楽ばかりでなく、全体の教養に大きな関係をもちますからね

⑮リトミックス（ママ）ですか

（幼児の教育復刻刊行会『幼児の教育』1巻-52巻（1979-1981）フレーベル館 より抜粋）

先ず、⑫について触れたい。倉橋は音楽の才能のある子どもの発見が重要であると述べている。J = ダルクローズも倉橋も、子どもの音楽の才能に合わせた教育をする事が、子どもにとっても、学校生活という子どもの社会にとっても有効であると考えていた。また、子どもの音楽の才能を発見し教育をするには、一般の保育者ではなく、専門家が適任であるという考えは、両者に共通のものである。⑪、⑬、⑭に見られるように、倉橋は幼児教育におけるソルフェージュの重要性とリズムについても言及している。J = ダルクローズが「聴く力」を重要視していることは、リトミック研究において明確な事項となっている。⑪、⑬、⑭の発言は、倉橋のリトミック理解が深まっていることを示すものである。リトミックは「聴く力」を伸長させ、リズム運動を活用することによって音楽のみではなく、人間全体の成長を目指す教育法であるという、倉橋のリトミック観がここに述べられている。この部分は問答法という形式をとっているが、質問者も返答者も倉橋自身である。倉橋は「幼児教育における全体の教養に大きな関係を持つものはなにか」という自らの問いに、倉橋自身が「それは

リトミックではないか」と答えようと意図して、⑮の「リトミックスですか」という回答を導き出している。リトミックを検討しはじめていた当初の時期から10年を経て、彼のリズム教育観はJ = ダルクローズのリズム教育観により接近したと捉えることができる。

さらにこの座談会の終盤にはこの様に記されている。

⑯あ、ピアノが聞えてゐますね。これから唱歌でせうか。一寸違ひますね。

⑰あれは、音感教育を試みてゐるのです。絶対音といふので、近來いろ／＼の意味で主張されてゐるのですが（中略）全體の教育とどう関係するか、今は未だ實驗してゐるところです。これは、研究の上で、またお話いたませう。

（幼児の教育復刻刊行会『幼児の教育』1巻-52巻（1979-1981）フレーベル館 より抜粋）

先の①の記述からも判るように、当初は倉橋も子どもの音楽は歌詞が重要だと考えていた。しかし、日本の唱歌のリズムは4分音符が主であり、2分音符がその次に使用される構成であることが多い。欧米の多様なリズムが使用される音楽との違いを聴き、感じ取る機会も後には増えてきたと考えられる。⑮に続く⑯、⑰で示されている活動の内容は、ピアノを使用してリトミックの実践を行っている実践を行っていることの報告である。倉橋の音楽教育観が変化したことが明確に解る部分であり、続く⑰には、倉橋はリトミックが子どもの育ちの全体に寄与するリズム教育であることを検討したいと考えて、今後もその回答を模索していくことが表明されている。

ここまで、倉橋惣三が幼児教育へリトミックを導入することの是非を検討していたことから、彼のリトミック観を読み解いてきた。この後、筆者の研究は下記の項目にある通り

3-2 欧米視察にみるリトミックの報告

3-3 女子教育へのリトミックの意義と実践

3-4 教育の方便としてのリズム教育研究

と続いているが、発表では時間の関係上、短く述べるに留めた。

日本が欧米文化の影響を強く受けた19世紀後半～20世紀前半の教育界において、我が国を代表する幼児教育者である倉橋惣三、幼児教育の様相を視察しに渡欧した学習院女子大学教授の宇佐美ケイ、『女子教育』の理念のもと開学した日本女子大学の初代体育教師白井規矩郎、海外教育思潮の研究や教育制度を専門とする日本の代表的教育学者である阿部重孝ら、それぞれの専門的見地からのリトミックの検討、報告、実践、研究の一端が明らかになった。明治、大正、昭和の初期にかけての日本の教育界の担い手であった彼らが、リトミックに教育的価値を見出していたことは、歴史的研究の成果の一つとなりえよう。

次年度は本プロジェクト研究テーマ「研究対象としての人間のとらえ方をめぐって一本学部の研究・教育のアイデンティティと独自性の確立と特色づくりにむけて一」の実現をめざし、この学問的成果とそれに基づく教育の在り方との密着性を探りつつ、学生への教育に反

映させていきたい。本プロジェクトの研究成果として、日本へのリトミック導入についての歴史研究の全体の概要を俯瞰する結果を示したいと考えている。

[参考文献]

- ・阿部重孝著「教育の方便としてのリズム」『帝国教育』第39号（1915）帝国教育会 他
- ・今井民子，笹森建英「日本の音楽教育に於ける身体表現のあり方：明治期の唱歌遊戯を中心として；舞踊と音楽の関係についての考察」弘前大学教育学部紀要第67号（1992）
- ・江間孝子「日本におけるリトミック教育の概念に関する諸問題」『リトミック研究の現在』開成出版（2003）
- ・神原雅之「幼児と音楽ーリトミックに関する研究動向を中心にー」『音楽教育学』第44巻，第1号，日本音楽教育学会（2014）
- ・倉橋惣三著『大正・昭和保育文献集』第八巻（1978）日本らいぶらり
- ・輿水はる海，松本千代栄「松本明治期遊戯の一考察」日本体育学会大会号（23）（1972）
- ・白井規玖郎著『韻律体操と表情遊戯』（1923）敬文館
- ・成瀬仁蔵『新時代の教育』（1914）博文館
- ・馬場哲雄，石川悦子「日本女子大学の体育発展に貢献した人々（4）」（1988）
- ・馬場哲雄『近代女子高等教育機関における体育・スポーツの原風景』翰林書房（2014）
- ・福嶋省吾「日本におけるリトミック教育の歴史的概観」『リトミック研究の現在』開成出版（2003）
- ・北条静『新編音楽問答』杉本二酉楼（1904）
- ・堀江遥「『韻律体操と表情遊戯』（1924）にみる白井規矩郎の唱歌遊戯教育観」『教育学研究紀要』57(1)，中国四国教育学会（2011）
- ・幼児の教育復刻刊行会『幼児の教育』1巻-52巻（1979-1981）フレーベル館
- ・ユーシー著，瀧村小太郎訳『音楽問答』文部省（1883）
- ・E.J= ダルクローズ著，山本昌男訳『リズムと音楽と教育』（2003）全音楽譜出版社

[注]

- (1) 倉橋惣三（1929）前掲書，p.200
- (2) 倉橋惣三（1914.3）大正3年「保育入門（一）」『婦人と子ども』第十四巻第一號，フレーベル會，p.3
- (3) 倉橋惣三（1915.1）大正4年「保育入門（十）」『婦人と子ども』第十五巻第一號，フレーベル會，p.32
- (4) 倉橋惣三（1930.5）昭和5年「保育座談會ー遊戯，唱歌についてー」『幼児の教育』第三十巻第五號，日本幼稚園協會 p.56